

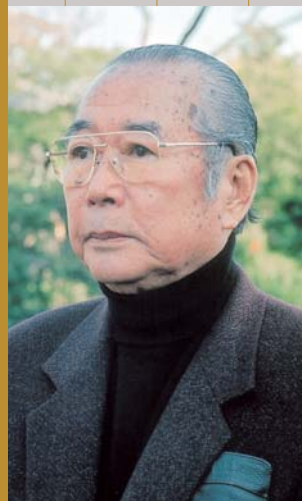
# 徳川家康公 と駿府

Tokugawa Ieyasu in Sumpu

作家

童門冬二氏

Fuyuji Domon



経歴

本名・太田久行。昭和2年、東京生まれ。東京都庁に勤め、広報室長、企画調整局長、政策室長などを歴任して退職、作家活動に入る。歴史の中から現代に通ずるものを好んで書く。講演活動にも積極的。平成11年、勲三等瑞宝章受章。主な著書に「小説 上杉鷹山」「近江商人魂」「渋沢栄一 人間の礎」など多数。

## 家康の情と非情の部下管理法

徳川家康が今川家の人質として駿府（静岡市）にいたのは、天文十八（一五四九）年から永禄三（一五六〇）年の十二年間だ。家康が八歳から十九歳までの期間だ。桶狭間の合戦で今川義元が織田信長に討たれたあと、家康は独立し岡崎城に戻った。

駿府にいたころ家康は多くのことをまなんだ。今川氏の商業重視の都市経営や、今川家の師僧太原雪斎の儒学や兵法の指導などである。これらの指導・経験によって家康は庶民の存在をしり、政治理念として、民は水、治者は船の考えをうちたてた。かれの生涯にわたるリーダーシップや人心掌握は、この理念の実現のためにおこな

われた。家康は、「ひとりの人間がすべての能力をそなえることはありえない」と告げていた。したがって事をなすには、つねに「人間の能力と能力の加算か乗算」を考えた。つまり「チームワーク」だ。岡崎へ帰国後、かれは町奉行を設けた。民生重視の姿勢だ。

しかし奉行は単独制ではなかった。三人制だった。高力清長、本多重次、天野康景が任命された。町の人びとは「ホトケ高力・オニ作左（本多の通称）・どちへんなし（どっちでもない）天野康景」とこの人事を批評した。つまり人情家の高力と厳正な本多と、その中間をいく天野という人事の組み合わせの妙を讃えたのである。

住職の太原雪斎に教えを受けたお寺。現在の本堂は、家康公が天正15(1587)年に再建。